

第26回 山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

演題	ベトナム旅行だって行けちゃうチームの取り組み
副題	～生きる力を引き出すリハビリ～

フリガナ	キョウサイロウジンホケンセンター
施設名	陝西老人保健センター
フリガナ	サギョウリョウホウシ カジヤマアカネ
発表者(職名・氏名)	作業療法士 梶山茜
フリガナ	ホリウチサオリ ナトリアヤコ タクサガワチエミ
共同研究者	堀内沙織 名取綾子 田艸川智恵美

【目的】 独居の男性利用者が、自宅で暮らし続けるためには、本人に係る家族を含めた支援者との連携が重要である。リハビリテーション会議(以下、リハ会議)をチーム力強化の場として位置づけ取り組んだ結果、利用者の力を引き出すことができたので報告する。

【事例紹介】 A様:90歳代、男性、要介護1。既往歴:高血圧症、敗血症性肺塞栓症後、リウマチ性多発筋炎、胸椎圧迫骨折。妻が認知症を発症し施設入所となって以降独居。妻の認知症の重度化・施設入所を機に、意欲低下からIADL・認知機能低下が表れ始める。その矢先、転倒し胸椎圧迫骨折にて入院。退院後の独居生活が安全に送れるよう、機能維持・向上を目的に通所リハビリ(以下、通所リハ)の利用開始となる。

【方法】 リハ会議への全員参加を目指す。コロナ禍であるためZOOMを介しオンラインでも参加できるよう配慮。会議の持ち方について検討。実施前、目的・役割分担・期限・達成目標などを事前に参加者に伝え考えをまとめて出席していただくこととする。A様には、通所リハ担当支援相談員等が面接し、意向をあらかじめ伺っておく。ケアマネと密に連携し、自宅でのA様の変化や支援者の視点などの情報を入手し、家庭生活・本人の行動パターンに合った目標を設定していくこととした。会議では取り組みや効果・達成状況・新たな目標を確認・共有する。

約束事として、参加者全員が本人に対するポジティブな発言を心がけることとした。

【結果】 オンラインの活用により、リハ会議には毎回ほぼ全員が参加。背部腰部痛を訴えるA様の当初の目標は『自宅での安全な入浴と身の回りの動作の自立』『盆栽の手入れが転倒なく行える』こととしリハ開始。短期集中個別リハ(以下、個別リハ)が終了する時点では、簡単な調理、洗濯、入浴、ゴミ出し、買い物等が自主的に行えるようになる。リハビリと並行しA様の生きる力を引き出すため、書道を提案・実施。承認欲求が満たされることでモチベーションが上がり、自宅での自主学習に取り組むなど生活が意欲的に変化。その頃には「ベトナムにいる孫に会いに行きたい」との意向が出され、家族も喜んで支援・協力を申し出てくれる。通所リハ開始から9ヶ月、A様はベトナム旅行でかけがえのない家族との思い出を刻むことができた。

【考察】 当事業所では通所リハの卒業に取り組んできたが、ご本人の合意を得ることは難しかった。そもそも卒業が本当にベストな選択なのか、迷いも多い。A様の事例では、開始時点で『卒業を見据えたプラン』を、ご本人を含め支援者が確認・共有できたことが大きい。近隣のケアマネに『集中的にリハを提供』『目標達成後は卒業』との認識・理解を深めていただくため、リハ職として生活に即した促しや提案を工夫していきたい。